

## 巻頭言

『臨床教育人間学第13号』は日本語論文と同時に、2013年に京都大学で、2014年にロンドン大学教育研究所（現・UCL教育研究所）で開催された「京都大学大学院教育学研究科—ロンドン大学教育研究所第六回・七回国際会議」の発表成果である英語論文を特集として掲載しています。

2013年1月から2014年12月の、講座の教員の業績および活動は下記の通りです。

矢野智司教授は、『幼児理解の現象学—メディアが開く子どもの生命世界』（萌文書林、2014年）、『大人が子どもにおくりとどける40の物語—自己形成のためのレッスン』（ミネルヴァ書房、2014年）、小笠原道雄・田中每実・森田尚人・矢野智司『日本教育学の系譜—吉田熊次・篠原助市・長田新・森昭』（勁草書房、2014年）等を出版しました。西平直教授は、『無心のダイナミズム』（岩波現代全書、2014年）、「めぐる時間・めぐる人生—「輪廻とは異なるめぐる時間」の諸相」（岩波講座『日本の思想、第五巻』2013年、pp.149-175）を単著で、『ケア講座・第三巻・ケアと人間』（ミネルヴァ書房、2013年）を編著で出版しました。また、2013年3月25日から4月1日にはブータンへ赴き、王国における青年調査を行いました。さらに、京都大学をはじめ、東京大学、北海道大学、上智大学、同志社大学、Technische Universität Dortmund等多くの大学にて講演を行いました。鎌田東二教授は、『究極 日本の聖地』（KADOKAWA、2014年）、『講座スピリチュアル学第1巻 スピリチュアル・ケア』（BNP、2014年）、『講座スピリチュアル学第2巻 スピリチュアリティと医療・健康』（BNP、2014年）などを編著で出版しました。齋藤直子准教授は、“Conversation of Justice: Rawls, Sandel, Cavell, and Education for Political Literacy,” in *Value and Values: Economics and Justice in an Age of Global Interdependence*, R. Ames and P. Herschok (eds.) (Hawai'i: University of Hawai'i Press, 2014)、および“Compulsion without Coercion: Liberal Education through Uncommon Schooling,” in *Philosophical Contributions on Compulsory Education*, Marianna Papastefanou (ed.) (Springer Publishers, 2014) を出版しました。またイギリス教育哲学会の学術誌に、ハーバード大学名誉教授ヒラリー・パトナム教授のインタビュー論文を、パトナム教授、ポール・スタンディッシュ教授（UCL教育研究所）と共著で出版しました（2014年）。さらに、2014年1月に採択され開始した京都大学研究大学強化促進事業・融合チーム研究プログラム（SPIRITS）の国際プロジェクト「＜翻訳としての哲学＞と他文化理解」では臨床教育学講座の大学院生も加わり、数々の国際交流企画を実施してきました。詳細はホームページ <http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/nsaito/> に掲載されています。

大学院生の業績としては以下が挙げられます。柄澤郁子「メルロ＝ポンティにおける自己変容の契機としての言葉」（『京都大学大学院教育学研究科紀要』第59号、2013年、pp.319-331）。中村育子「自覚」概念の存在論的捉え直し—上田閑照の「自覚」の思想を手がかりにして」（『京都大学大学院教育学研究科紀要』第60号、2014年、pp.167-179）。朝岡翔「死者の記憶から立ち上がる市民的倫理—リクルの記憶と歴史に関する論究を手がかりに」（『京都大学大学院教育学研究科』第60号、2014年、pp.195-207）。門前斐紀「木村素衛における美的人間形成—「絶対無の美学」から美的体験を考える」（『京都大学大学院教育学研究科紀要』第60号、2014年、pp.153-165）。福若真人「他者の死」への倫理的応答を触発する「教え」—レヴィナス思想に見る「死」の主題化と「語り直し」（『ホリスティック教育研究』第17号、2014年、pp.45-54）。蒲生諒太「哲学者＝実践家としての久松真一—茶道の講話を手がかりに」（『京都大学大学院教育学研究科紀要』第60

号、2014年、pp. 209-221)。高倉美帆「神谷美恵子の思想における〈脱中心的自己生成〉—その受苦的存在への洞察をめぐって」(『教育哲学研究』第110号、2014年、pp. 49-69)。西郷南海子「『子どもの美術』の編集経緯と採択の壁—「商品ではない教科書づくり」の挑戦」(『教育史フォーラム』第9号、2014年、pp. 61-82)。

## 特集「ロンドン大学教育研究所—京都大学大学院教育学研究科第六回・七回国際会議」

特集「京都大学大学院教育学研究科—ロンドン大学教育研究所第六回国際会議」は、“Comparative Philosophy as Education: *Education and the Kyoto School of Philosophy: Pedagogy for Human Transformation*”として2013年9月22-23日、京都大学百周年時計台記念館で開催された国際交流企画の成果です。本会議は、2012年に出版された、ポール・スタンディッシュ教授との英語の共同編著 *Education and the Kyoto School of Philosophy: Pedagogy for Human Transformation*, Paul Standish and Naoko Saito (eds.) (Springer, 2012) を主題にしたものです。異文化間の対話の中で日本思想の意義を伝えること、そして「教育としての比較哲学／教育としての哲学の比較」(comparative philosophy as education) の教育的意義について考えることを目的に、会議では、京都学派の哲学と人間変容に関わる教育の意義についての議論が繰り広げられました。この国際会議に先立ち前日には、スタンディッシュ教授のご指導のもと、ロンドン大学教育研究所 (IoE) の大学院生と、臨床教育学講座の大学院生、学部生による英語発表とディスカッションが行われました。もうひとつの特集「京都大学大学院教育学研究科—ロンドン大学教育研究所第七回国際会議」は、2014年3月25-26日、SPIRITSのプロジェクト「翻訳としての哲学と他文化理解：双方向的国際化に向けた哲学と教育の学際研究」(齋藤直子代表) とイギリス教育哲学会の共催でロンドンで開催された大学院生主体の国際コロキアムの成果です。上記の SPIRITS プロジェクトの教員、国際メンバーのスタンディッシュ教授、およびロンドン大学教育研究所の大学院生と臨床教育学講座の大学院生が2日間にわたり、「翻訳としての哲学と他文化理解」に関わる発表、映画視聴、議論を行いました。初めて英語で発表をした講座の大学院生も英語での議論に積極的に参加しました。この会議に続いて参加大学院生はオクスフォード大学で開催されたイギリス教育哲学会の年次大会に参加しました。本特集に掲載された英語論文はこうした国際会議での発表を中心に、講座の大学院生が京都大学の研究者、教員および、外国の大学の研究者や大学院生との国際的な対話交流の中で生み出した英語発表の成果です。

また、第六回国際会議に先立つ2013年9月4、6、9、11、20日には、スタンディッシュ教授による「国際教育研究フロンティア C」の授業“Education and the Retrieval of the Past: Remembering and Forgetting”が京都大学大学院教育学研究科で開講されました。上記第七回国際会議での学生発表は、この授業での英語のトレーニングの成果が反映されたものでもあります。

これまでと同様、授業と会議を通じて講座学生の指導にあたり、7回にわたる国際会議を通じて京都大学の学生・教員とロンドン大学教育研究所の学生・教員との交流の機会を作り、また講座から同研究所に留学する学生への指導をして下さってきているスタンディッシュ教授に、御礼を申し上げます。

2015年3月10日  
齋藤直子